愛してる、ただそれだけ。

蝴蝶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト http://pdfnovels.net/

注意事項

は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ 囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範 テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。 この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ 小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛してる、ただそれだけ。

Nコード]

【作者名】

蝴蝶

【あらすじ】

た。 ァ ったくない。 自殺しようとしたとのこと。だがアリシアには結婚などする気はま 婚約者との気持ちのすれ違いから自らの命を絶とうとしたアリシ 一命はとりとめたものの自分に関するすべての記憶を失ってい 自分の婚約者と名のる男いわく自分は結婚式を目前にひかえて と結婚をせまってきて... 記憶を失っているからだ。 なのに彼は記憶が無くても

私だけを永遠に愛すると言ってくれた事ももう信じられない。 いつでも傍にいる、そう言ってくださったのは嘘だったのですか?

あなたが私を愛してくれたように私もまたあなたを愛していました。 どうかあなたを愛した私がいたことを忘れないで。

どうかお許しください。

この命を絶つことを。

「ここは...どこ?」

私が目を覚ますと見慣れない部屋が私の視界に飛び込んできた。 この家具も壁紙も、何もかも見たことがない。

いや。そもそも見慣れた部屋が思い出せない。

自分が住んでいた部屋が思い出せないなんてありえないはずなのに。

そういえば自分の名前すらも思い出せない。

視界に映る物の名前はわかるが自分のことはわからない。

何故自分はここにいるのだろう。

見るからに値が張りそうな調度品ばかりがならんでいるこの部屋に。

-... つ!.

自身をよく見てみると腕や脚には包帯が何重にもまかれている。 事故にでもあったのだろうか。 体を起こそうとした途端、 全身に激痛がはしった。

考えをめぐらせていると部屋の扉が開いた。

そこには2人の男が立っていた。 自分の状況から判断するに、 一人は医者のような格好をしていた老人。 彼は医者で間違いなさそうだ。

もう一人は一般庶民には手が出せないような高級な生地でできた服

をまとっている。

貴族の男だろうか。

その相貌はとても美しく、 みていると引き込まれそうになる。

蜜を溶かしたかのような甘い金の瞳。

夜の闇よりも深く、艶やかな黒髪。

まるで絵画から抜け出してきたかのようだ。

二人は私が目を覚ましているのに気づくとぽかん、 とした表情にな

目が...覚めたのか。

なんと!まさに奇跡としか言いようがない!」

次の瞬間、私は男の腕に閉じ込められていた。

この男には会ったことがないはず。

なのに何故か心地いい。

触れあっているところから伝わる体温が懐かしい。

「あ、あの..。」

私が言葉を発した途端、 男ははっとした表情になり私を自分から引

きはがした。

自分から抱きしめてきたのに。

「その...すまない。今のことは忘れろ。」

彼はそう告げた。

ものすごく偉そう。

怒りがふつふつと沸き起こってきたが知らない男に怒っても仕方が

なし

゙…アリシア様?」

私がしかめ面で考え込んでいることに心配したのか老人が声をかけ

てくる。

アリシアとは私のことだろうか。

「アリシア?それが私の名前?」

そう問うと老人の表情が暗くなった。

「...やはり記憶を失っていましたか。」

「やはり、とはどういうことだアズノ。」

先程の低く綺麗なテノールとは違い、 で男が問う。 まるで地を這うような低い声

まずはアリシア様に。」呼下。それは後ほどご説明致します。

やはり私の名前はアリシアで間違いないようだ。 そう言うとアズノと呼ばれていた老人は私に視線を向けた。

貴女は此のリルマーシャ王国が国王、アルスラン= アリシア= レイニー 火 それが貴女の名前で御座います。 リルマー

様の婚約者。

つまり我が国の女王となるべきお方です。」

.. 婚約者?国王の?

この老人さらっと凄い事を言った気がする。

に頷いた。 アルスランに目を向けると彼はそのとおりだ、 とでも言わんばかり

そんな淑やかな性格でもないし...多分。けど自分そんな女王とかムリだし...多分。自分の記憶まったくないけど。むしろ有り得てはいけない。いやいやいやいや。

こうふわっとしたオーラ漂ってるみたいな。 ...もしかして記憶あったときは貴族のお嬢様みたいな。

「嘘だ。」

そんな性格だったのかな?

「本当だ。」

今まで傍観していたアルスランが口を開いた。

本当...なのか。

私が?国王の婚約者?

このまま無限に考え続けても意味ないだろう。

「あの...アルスラン...様?」

「アルでいい。

「...アル様。私はどうしてこんな怪我をしているのですか?」

アズノに視線を向けると彼もまた目を伏せた。そうすると彼はまたはっとした顔になった。

親の目を盗んで更新するの難しいな..

沈黙が怖い。

私は何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか。 でも自分のことなんだから聞いてもいいはず。

: 誰か、 誰でもいいからこの沈黙をなんとかしてください。

...わかった。 アズノ、 席を外してはくれないか。 お前の知りたいことをすべて話そう。

自分のことなのに聞くのが怖くなってくる。 人生で最大の決断をしたかのような表情でアルスランは言う。

ですがアリシア様の診察をしなければ。「勿論で御座います。

...そういえば"やはり"とはどういう意味だ。診察をしてからでかまわない。あぁ。そうだったな。

· それは.. _

が覚める確率が低かったらしい。 アズノいわく、 私は大怪我をして血を大量に流してしまったため目

体に障害を持ってしまったりする可能性があったと。 そして目が覚めたとしても脳に異常がでて記憶を失ってしまっ たり

そうだったのか。

私の怪我がそんなにひどいものだったなんて思いもしなかった。

はありますか?」 「アリシア様。 どこかひどく痛む場所や体調が悪いなどということ

「…いえ。何も。」

彼が包帯を変えるときなどの動きに全く無駄がなかった。 王宮で働くぐらいなのだからそうとう腕の立つ医者なのだろう。

「では陛下。異常がないようですので...。」

「そうか。下がれ。」

その言葉を聞くなりアズノは深々と頭を下げて部屋からでていった。

再び沈黙。

何から聞けばいいのかさっぱりわからない。

「…アリス。お前は何が知りたい。

で彼は言った。 人に問うという行為をしているとは思えないほどの抑揚にかける声

絶対に疑問系でなかったと思う。

アリスとは私の愛称だろう。

私はアリシアという名前らしいから。

.. 愛称のことは置いておくとして本当に何から聞けばいいのだろう

こういう問い方はあまり良くないとは思うがこの際仕方がない。

「...すべてを。私のすべてを教えてください。」

のだ。」 「お前らしい質問だな。記憶を失ってもそういう所は変わらないも

そう言うと少しだけ微笑み、私のことをぽつりぽつりと話し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

ビ対応 行し、 公開できるように 小説家になろうの子サイ 部を除きインター 最近では横書きの F小説ネッ の縦書き小説 の縦書き小説 ています。 そん をイ を思う存分、 たのがこ な中、 ネッ 書籍も誕生しており、 タテ書き小説ネッ ト関連= 誰もが簡単にPDF形式 ネッ て誕生しました。 ト上で配布す 小説ネッ 横書きという考えが定着しよ てください。 トです。 既 は 2 0 存書籍 タイ いう目的の基 07年、 の電子出版 小説を作成 小説が流 ンター

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。 http://ncode.syosetu.com/n3113z/

愛してる、ただそれだけ。

2011年12月12日23時47分発行